

■ 研究報告

ある精神科医の病跡

——ガエタン・ドゥ・クレランボーについて——

小 泉 明*

I はじめに

1934年11月17日、パリ近郊マラコフのダニクール通りに住むブジャード博士夫人の土曜の朝の静寂は、一人の取り乱した老婦人の突然の訪問によって破られた。それは、同じ通りに住む友人の女中の時ならぬ来訪であった。あえぎながら彼女は言った。「だんな様が……御自害なされたのです。」

肘掛け椅子に身を沈め、両足を壁にもたせかけ、椅子が動かないように、後方をベッドで固定し、そして、「鏡」に対峙して、口の中にピストルを撃ち込み即死であった。弾は後頭部を貫通していた。このドラマは、ほどなく警察の知るところとなり、警察医が現場に赴いた時には、遺体の右かたわらにはピストルが、左かたわらには鼻メガネが落ちていた。この日の朝、彼は、友人某博士に宛てた手紙をしたため、遺言状を書き上げ、それから、「突撃でもするかのように」寝室へ駆け上り、そして、この惨事となったのである。

これが「熱情妄想病」の細緻な記載や「精神自動症」の理論構築により、その名を後世に残した天才的精神科医ガエタン・ガスティアン・ドゥ・クレランボーの最期の状況である。「フランスにおける20世紀初頭の最も偉大な精神科医の一人」¹⁾に数えられる彼は、わが国では、パリ警視庁医務局における名人医師としてその名



G.G. de Clérambault (1872-1934)

(E.M.C. Psychiatrie 1 より)

が知られているが、彼の人柄、伝記、また詩やデッサンを物する芸術家としての側面、アラビア布のドレープに関する独創的な民族学者としての横顔は、ほとんど知られてはおらず、わずかに武正²⁾による「クレランボーとその死」と題する論文により、彼の晩年の様子と死の状況とが透見できる程度である。

1914年から1918年までの間、軍医としてあらゆる前線に出陣した彼は、モロッコ、ギリシア、近東諸国などで、その土地、その土地の風習に興味をひかれ、特に、アラビア婦人服の撮影、デッサンは数万点にも達し、その大部分は、死後、パリの「人類学博物館」に寄贈されている。彼は、1923年10月より1926年の突然の理由不明の追放までの間、パリの「国立美術学校」で、アラビア服のドレープの理解、ひだの正確な取り方についての講義を行ない、「パリ警視庁医務局」において得たと同様の熱烈な聴衆を「美術学校」においても見出した。年に1度は、ソルボンヌの「民族学会」で新発見、

Biographical sketch on Dr G.G. de Clérambault

*弘前大学医学部精神科, Akira Koizumi: Department of Neuropsychiatry, School of Medicine, Hirosaki University, Hirosaki.

新説を発表していたのである。

われわれは、当論文において、わが国では今まであまり知られることのなかったドゥ・クレランボーの生涯について、特に彼の精神医学と民族学における創造の源泉と、彼の死の秘密について、彼の生い立ちを想起しながら述べて行くことにしたい。

II 生い立ち

ガエタン・ドゥ・クレランボーは、1872年7月2日、フランスの中央部シェール県の県庁所在地ブルジュに生まれた。父は、登録検査官の地位にある役人であったが、考古学に造詣が深く、リムーザン地方の要塞トゥルノエル城についてのデッサンと研究論文のいくつかを物するほどの人であったという。父方の祖先は何世紀にも亘るトゥールの古い家系に属し、トゥールとその一帯で行政官の職を独占していた。彼らは、自らの領地を耕し、「アンシアン・レジーム」下の地方貴族たちの習わしとして、軍隊を国王への奉公のために献上していたという。また家系図を見ると、父方祖先が哲学者デカルトと直接に血縁がつながっている。クレランボーの父エドゥアールは、1968年35歳の時、シャルル10世の宮廷に仕えていた古い貴族サン・シャマン伯爵の令嬢で当時25歳とも15歳ともいわれる、うら若く気高い女性と結婚した。これがわれわれのガエタンの母となる人である。彼女の家系図を見るとまず曾祖母が、フランス・ロマン主義の4大詩人の一人アルフレッド・ドゥ・ヴィニーの従姉妹にあたり、また、彼女の家系とロマン主義のもう一人の詩人アルフレッド・ドゥ・ミュッセとの間にも遠い血のつながりがあるという。ガエタンの両親にはガエタンのほか二人の子供がいた。一番上がマリーというガエタンより2歳年上の姉であるが7歳の時に死亡、ロジェという弟は、結婚はしたものの嫡子のないまま1933年に死亡、その翌年ガエタン自身も独身のまま自らの命を絶ったためクレランボーの家を継ぐ者はなく、家系はここで途絶えた。

ガエタンの誕生から13歳の秋までの記録は、母親⁴⁾の手によって為されている。そこからうかがわれることは、ガエタン自身、並はずれた神童ではなく、何事にも旺盛な興味を示す普通の利発な子供であるということである。2歳半ばで言葉を完全に修得し、母親に読み書きを教えてくれとせがむほど、知的好奇心にあふれていた。一カ月間でアルファベットと数字を覚え、何なくそれらを組み合わせることができたという。しかし、この急速な知的発達には、生来の病弱さのため中断された。はじめのうちは、ハンカ、猩紅熱といったありふれた子供の感染症を罹患していたが、1878年6歳頃には、目、心臓、胃部に、奇妙な痛みの走る病が起こったことが記されている。これが、「水療法」で消退したことから、病を「神経因性」とみなすこともできようが、とにかく、彼の前途に、幼年時代からすでに何か不穏なものが立ちこめていたことが指摘されよう。

幼年時代、青春時代のクレランボーの教育は、カトリックに深く根づいたものであった。「フランススコ修道会の礼拝堂では、キリストの聖体大祝日の行列が練り歩いていた。白い衣をまとった童女たちが芳しい臭いを放つバラの枝をいくつも地面に撒き散らしていた。すると、聖歌隊の子供たちの赤い行列に先導された聖体行列が進んで来た。その中の一人の幼ない男の子が皆の注目を集めた。驚くほどの威厳がその顔にあり、その動きは宗教的リズムに揺れ、まるでその子の動作のそれぞれの中に、その子の魂があるように見えた。このような赤い服を着たのは、この時が初めてであり、このまばゆい色彩を彼は、一生にわたって愛し続けるのであり、この色彩はまた彼の芸術家の夢を包むことになるのである。」⁴⁾ 学校での最初の最優秀賞のほうびとして「礼拝堂士官」に任命され、ミサ答えをし、燭台に灯をともし栄誉を与えられたことが、母の手記によって知られている。

遠い極東の地のスポーツ「柔術」をもこなすほどのスポーツ愛好家としての彼の萌芽は、4歳の頃、大司教区の庭も狭しと木馬を走らせた

幼ない姿に見てとることができよう。木馬は、10歳の頃にはロバに替り、そして、成人して後の、卓越した馬術家として幾多の戦役で武功をあげる愛国的軍人として結実するのである。馬術家としてのクレランボーの姿は、親戚筋にあたるドゥ・ラ・リヴィエール將軍のクレランボーの父に宛てた手紙からうかがわれる。「親愛なるエドゥアールよ、今朝、森で御子息に会ったが、あれはケンタウルスだね。」

1885年、クレランボーは、スタニスラス高等中学校第3級に入学、生まれて初めて両親から離れた生活が始まった。理工科大学生になるという将来の夢の実現の第一歩としてのこの学校の制服を身にまとうことは嬉しかった。すぐに学業にも頭角を現わし、100人の生徒中、数学は1位、ギリシア語は5位であったという。11個の賞を獲得して両親の待っているゲレに戻った時、母親は、どんなに狂喜して息子を迎えたことであろうか！ そのことは、躍動する彼女の文体からうかがい知ることができる。そして、1885年10月で、母親の手記は終わっている。

III 青年時代

13歳以降のクレランボーの生涯についての詳細はわれわれには伝わっていない。ただ、大学入学資格（バカロレア）を、1887年と88年の2年の間に取得していることが知られている。高等中学校卒業後は、多数のロマン派風の詩を物したり、音楽にも傾斜したが、やはり特筆されるべきことは、絵画に身を入れて打ち込んだことであろう。2年間も「造形美術学校」のL・O・メルソンの講義に通い、デッサンの研究にめざましく励んだにもかかわらず、結局は、敬愛する父親の希望を容れて「法律」の勉強を始めたのである。しかし、これが終了するや否や、家庭の経済状況の悪化を乗り越えて、パリにおいて、医学の勉強を開始したのである。その間、第51歩兵連隊において兵役を行ない、ボーヴェに駐屯したことがあったという。その後、パリ病院外勤医、セーヌ県立精神病院内勤医となり、急スピードで精神医学を専攻する。医学の勉強も終わりに近づいた頃、オーストリアの

ある高名な伯爵夫人の下に1年近く住み込みで勉強する機会に恵まれ、帰りにはドイツを旅行している。

1898年、26歳の時、セーヌ県立精神病院の内勤医となった。カプグラ、ロア、ミニョーなどが同僚であったという。1899年には、「耳血腫」に関する学位論文を提出している。1905年には、パリ警視庁医務局の副主任医師に任命されているが、クレランボー33歳のことである。

IV 戦場にて

1914年から1918年の第一次世界大戦時、カメラを担いだ一人の風変わりな軍医の姿があちこちの前線に見られた。戦闘の場面のほか、各地方の風物、衣服などにカメラのシャッターが切られた。これが、前線におけるクレランボーの姿である。医師としてパリに残ることをせず、むしろ積極的にアフリカ行軍第1連隊に参列するためモロッコに赴いた。ペルグラン將軍の命令に従って闘ったが、他に、土着民を理解し、これに治療を施すため、アラビア語修得に努力を傾けた。

彼の所属していた連隊の飛行隊長は、クレランボーが40歳を越えてなお常に前線で闘い、いつも斥候を務めていたことを賞讃している。「彼は闘士、比類ない騎兵であった。そして何という勇気であろうか……」⁴⁾

その後、彼は、マラリア撲滅対策使節に加わり、近東前線へと赴いた。戦場で脚に重篤な傷を受けた彼は、ギリシアのサロニカにあるマリー・ボナパルト姫の病院で手当を受けたが、その後は、モロッコのフェスでゆっくりと回復期を過ごし、そこで種々の民族学的研究、特に、アラビア布のドレープの探求に明け暮れた。

クレランボーは、熱烈な愛国者であった。彼には、戦場における武功により「戦争十字勲章」、「レジョン・ドヌール勲章」などが授与されている。

V パリ警視庁医務局とクレランボー

1920年、クレランボーは、パリ警視庁医務局の主任医師となった。48歳の時である。彼の研

究が最も精力的、生産的に推進されたのは、この時期である。「熱情妄想病」そして「精神自動症」に関する主要な著作が次々と発表されたのも、ここ、警視庁医務局においてであった。結局、クレランボーは、1905年から34年までの29年間、途中、戦争による中断はあったが、ここで毎日、種々の患者の症例を観察、収集していたのである。

パリ警視庁医務局は、シテ島の中にある「パリ裁判所付属牢獄」の近くの時計台河岸通りにあった。そこは、昼でも日が差すことはなく、ほとんど1日中、灯りをともしていなければならなかった。そこは、また、狭苦しく、男子用独房が11、女子用独房が7つあるだけで、かつて、1871年までは、(パリ)警視庁留置所という簡略な名前と呼ばれた所であり、狂人だけではなく、犯罪者、売春婦、不具者、浮浪者が次々と運び込まれて来た場所だったという。パリ警視庁医務局が「医療」の目的のためにパリ警視庁留置所から独立するのは、1872年、クレランボーの生まれる約4カ月前の2月28日のルノー警視総監の回状に拠っている。しかしながら、この2機構の分離の後でも両者の関係が全く絶たれたわけではない。両者を隔てるものは、1枚の簡素なドアだけであった。警視庁医務局の患者たちは、2種類に大別されていた。その大部分は、まず、警察署から送られて来る者たちで、警察の調書作製、また、医務的証明書発行の依頼を目的とするものであり、残りは、ラ・サンテ、ラ・プティット・ロケットなどの刑務所、感化院から送られて来る刑事被告人や、刑のすでに定まった犯罪者たちで、「詐病」の判断の依頼を目的として送られて来たものであった。医学的判断は、「初診」によってなされるのがしばしばで、患者の行動の観察がどうしても必要な場合や、証人を呼んだり、調査の補充をしなければならない場合に限って、滞留期限が数日間延長されたという。クレランボー以前の医務局の主任医師としては、ラセーグ、ルグラン・デュ・ソール、ガルニエ、デュプレが挙げられる。そして、ここ、警視庁医務局において、1905年より死の前日まで、クレランボーの

炯眼が、患者たちを捕え続けたのである。彼は、午後2時から3時頃に、医務局に現われた。午後いっぱい患者の診察、症例の考察に費やした。彼の、患者の操作の仕方は繊細を極め、ほとんど芸術の域に達していた。彼の論敵でさえ「金曜日の講義は、かなり不思議な、そして、非常に感動的な光景であったが、ここで、最も狭く、最も暗く、そして最も古ぼけた一隅における見事な臨床精神が展開した。……医務局の名人が口頭で講義を行なってくれたが、そこに、われわれの世代の全てが一心不乱に駆けつけたものであった」¹⁾と描写している。彼の患者観察は、英語、ドイツ語、スペイン語、そして、モロッコ戦役の際に修得したアラビア語などの博言家的知識によって実り豊かなものとなっている。

彼は、また、患者たちを「元のままで見る」ことを望み、内勤医たちが自分よりも先に患者を診察することを許さなかった。彼らが診察室に入って来た時から観察が始まり、彼らの態度、装いの下に隠された意味を即座に把握した。日常の臨床場面では、尊大で気取った緘黙の患者に出会うことも少なくない。そんな時は、わざとなれなれしい表現を使ったり、隠語を使用したりもした。「これはまた、ろくでなし——おっと失礼、親愛なるろく婦人でしたね」と彼が言うと、その婦人は微笑し、患者との接触が成立する。もう一つのエピソードがある。医務局の「お客さん」すなわち、「累犯者」の躁病患者が、ふざけて無言の状態に身を置き、クレランボーに対峙した。それには気づかない風を装って、クレランボーは、いつまでも鉛筆を削り続け、患者の様子をうかがっていたが、この患者にはよくある言葉の爆発的流出が現われない。クレランボーは、放心したように患者の顔を戯画的に描き始める。患者は、とうとうこらえきれずにデッサンを奪い取り、こう言う。「クレランボー！ お前いったい本気かよ」言葉の波がとめどなくあふれた。彼の「天才的聴罪司祭」と呼ばれる由縁である。

また、彼の魅惑的言辭、百科全書の学殖、消え去った部族にまで及ぶアラビア布のドレープ

の逸話の挿入された冒険は、聴衆を魅了し、講義が4時間、そして5時間に延長しても、倦むことがなかったという。

VI 民族学者として

クレランボーには、「精神自動症」、「熱情妄想病」の緻密な観察記載で知られる卓抜した精神科医としての姿のほかに、民族学者としての顔があるが、それは、ドレープの工芸的分野の研究において際立っていた。これは、「えり留め」に関する仕事とギリシアのドレープにおける花づな装飾ヘリの研究とに大別される。クレランボーの民族学者としての学殖は、彼の診察場面にも顔をのぞかせ、その様子は、かつてその場に出席したレオン・ミショーによれば次のようである。「医務局の『お客さん』は、無限に多様である。ドレープのある衣裳を着たアラビア婦人がやって来るのを見るのはまれではない。その時に、民族学を極め、美術学校における数多い講義を地中海諸国の『ドレープ』の研究に充てたというクレランボーの印象的な百科全書の学殖が現われる。彼はマントからトーガ、そしてアラビアの頭巾付外套への移り変わりを明示してくれた……」²⁾

彼は、実際、1912年と19年のモロッコ旅行以来、種々のアラビア衣裳を研究し、部族、年齢、宗教などによって、ドレープのニュアンスがいかに異なるかを見ようとした。それは、古代のすでに失われた部族の衣裳のドレープに及ぶことさえあった。彼は、新旧の肖像画集をも多数集め、ひだの秘密と額や肩に掛かるヴェールの象徴的意味を詳細に調べ上げた。鬨いの傷を癒すためにモロッコに滞在していた時、恥毛を剃った青年の体にドレープを試着させていた彼は、その後は、パリで、コンゴの写真、アッシリアの装飾帯、ビザンチンの写本で認めた衣裳をマネキン人形に着せてみたのであった。

美術学校に現われる時、クレランボーは、さまざまな小さな人形のいっぱい詰まった鞆を持って来る。その中から人形を取り出し、それにドレープを着せてみせる。時には、人形にばかりではなく、生きたモデルにもアラビア布のド

レープを着せる。布地に恭々しく触わりながら、そのでき上がる様子に想像を巡らせ、その技法を探ろうとする。布地の原産地を訪ね、古代の石棺の中に同様の物が無いかと探し回る。東洋の布地の切れ端は、彼の研究の対象の全てであり、ことに北アフリカ原住民の洗濯法に興味を魅かれた。彼の、豊富な資料と豊かな学殖に裏づけられた熱情的にしてエキゾチックな講義が、美術学校での聴衆の人気を博さないはずはなく、満員のため、しばしば講堂の入口の鍵を内側から下ろさざるを得なかったという。しかし、1923年から始まった評判の高いこの講義も1926年、原因不明の理由により中断されてしまったのである。

そして、毎年、「民族学会」で、いくつかの独創的な研究発表を行なっている。

VII クレランボーと女性

今夜は、一緒に夢を見よう
君が僕のもとを去って行く日のことを
僕たちを結びつけたのは偶然なのだ、
幸せになろう、僕たちはもう愛し合っていない。

これは、15歳の時から清らかな愛を育んで来たある女性に対するクレランボーの失意の詩の一節である。20歳の彼に、女性に対する軽蔑の気持ちが湧き上がり、ロマン主義と決別した彼は、これから、孤独の中で、特有の「女性蔑視」を形成して行く。彼は、自ら、芸術家であることを愛し、情感の装飾のない純粹に肉体的な喜びの中に美的歓喜を見い出した。彼は、「愛」という言葉を「調和」という語のように愛した。愛は、彼にとって、もはや真の情感の継続のない一時的な結合の形でしか存在しなかった。そして、1904年「進め……日々の責務へ……」と歌った詩を最後にもはや再び詩作することはなかった。

彼は、自由と仕事の障害となる結婚を畏怖し、必要な時に女性を呼ぶ以外、全く一人きりの孤独な世界に沈潜して行った。そして、さらに種々な形で、彼の「女性蔑視」の傾向を強め

て行く。医務局で、女性の内勤医を一人として受け付けなかったことは衆知であるが、その他にもこれを裏づけるエピソードがある。彼には、自分が育てたいく分かの評価を与えている若い秘書がいたが、ある時、本棚の整理のため、踏み台に上り、本を1冊ずつこの秘書に手渡していた。突然、この規則正しい儀式的進行が止まった。振り向くと、何とそこには垂れ下がった髪をかき上げている彼女がいたのだった。古い本を整頓すること、それは、敬虔な気持によって行なわれるべき厳粛な行為であるのに、それが分っていない！ やはり女だ……。

クレランボーの「女性蔑視」と、自己の官能の充足のためにのみ女性を愛するという性向は、母性愛の必要のためにのみ息子を愛したようにさえ見える高慢な母親から譲り受けたものであるように見える。クレランボーと母との間の分断は、かなり早期に起こった。彼らの性格は衝突せざるを得なかった。母は息子を理解することができず、母から離れた息子は、母に対して、敬意の念のみを生涯抱き続けただけであった。

クレランボーの尊大にして魅力的な遊蕩者としての姿は、次の描写からうかがわれる。「勇敢な兵士は、栄光の負傷の回復期をフェスにて過ごし、何もすることのない倦怠の日々を送っていたが、それをいやしてくれたのは、魅惑的なモール人女性たちであった。酷熱の午後、二人の若い姉妹が、……主人の下にやって来た……」また、奇妙な眩暈を誘う植物の芳香の満ちあふれているパリ近郊モンルージュの小さな別荘でのなま暖かい夏の大気の中でクレランボーは夢想する。古代の赤い袖無し着を着た謎めいた神である自分が、自分を待ってさまよっている女たちの影に、葉陰をかき分けて近づいて行く……。すると、どこにでもあるようなありふれた近代的なパリ近郊の空の下で、「一瞬間、古代美の確固とした荘厳さが甦える、そこには、ギリシア的官能の純粋な調和が、形体、動作、色彩に結合してある」⁴⁾ クレランボーは、忘れられた信仰の遅れてやって来た大司祭である。

VIII その人

「パラノイアの年寄り！」これが彼のお気に入りの自称であった。限りなく多様な性質が跡づけたいく千もの刻印の対比によって満ちあふれた厳しく尊大で気難しい顔貌をしていた彼は、美しい形体をこよなく愛した反面、醜怪な肉体を憎悪し、不具者を正視することができず、思わず視線をそらしてしまったことを告白している。真実に対する燃えるような愛と、ささいな矛盾をも許すことのできない不寛容さは、自らの論敵に対する激しく、そしていく分かの輕蔑をも含んだ、時には決闘にまで発展しかねない返答の形を取ることがあった。知的領域における彼の優越性故の高慢さは、特に完璧なもので、自身で秘かに温めていたアイディアが論敵たちに掠奪されていたと気づき、何度も「アイディアが盗まれる」と繰り返し、ルヴォー・ダロンヌ、ジャック・ラカン、アンリ・クロードなどを容赦なく攻撃した。

しかし、このような頑固で気荒く厳格な面のみからクレランボーを見ることは表面的に過ぎ、彼に対する真の理解から遠ざかってしまうことになる。クレランボーは友情に厚かった。だが、彼の援助は目立つことなく、ほとんど匿名であった。経済的困窮に立たされていたある画家は、ある日、戸口に差し出し人不明の封筒を見つけた……。仕事に恵まれなかった老画家は、こうして、肖像画の注文を受け取ることができたのである。彼の優しさは精緻で、常に隠れたものであった。患者たちにも愛情を注ぎ、彼らのために時間と忍耐をさくことを惜しまず、彼らの苦しみを柔らげ、最も不幸な人たちには金銭の施しをしたことさえあった。また、自分の気高い血筋について、親しい友人たちにさえ、これを語ることはなかった。

IX 創造の源泉

インドの更紗、マドラス織、金銀で織った東洋の布に対する執着と、等身大、あるいは、もっと小型のろう製マネキン人形を家に飾り、毎日それに着物を着せていたという話で人々の話

題をさらった風変わりな医者は、布地にドレープに、いったい何を見ていたのであろうか。これを問う時、「クレランボーは、自身で、恐らく精神自動症を病み始めていたのであろう」³⁾という仮説が浮かび上がって来る。「これら(布地)の深求は、精神自動症の構築に役立った探求と同様の緻密な観察と厳格な論理性とによって推進させられた。この分野において、クレランボーは芸術家であった。しかし、科学者の手法を用いた芸術家であった」⁴⁾これは、換言すれば、布地のドレープの理解、ひだの取り方の苦心が、患者の呈する症状のひだ、陰影を見分ける努力と重なることを意味し、彼の芸術家、民族学者としての目が、臨床場面にそのまま反映していることを物語っている。逆に言えば、患者の症状のひだ、レリーフを見る臨床医の炯眼が、そのまま、アラビア布のドレープ、ひだを見る芸術家のまなざしと一致するのである。自身が「精神自動症」を病んでいたと推測される彼の場合、結局は、自身に深く沈潜し、自身の心のひだ、陰影を見極めた時かえって患者ならびに、アラビア布のひだ、陰影がますます鮮明に浮かび上がり、また逆に、患者や布地のレリーフ、明暗に浸透することにより、さらに明瞭に自分自身を見出ししていた、と言うことができないであろうか。奇妙なことには、パリ美術学校における東洋のドレープに関する講義の開始された1923年10月から2カ月後に「精神自動症」の最初の公式な記録が発表され、1924年、25年、26年と、年を追うごとにこの一致が顕著になって行く。1926年に、クレランボーは、美術学校を追放され、1927年に、「精神自動症」に関する医学論文が終結し、ここにおいて両者の奇妙な併行関係は立ち切れている。そしてこの年に、最初の眼症状が出現している。

「女性的なほど優美な、極度に感受的な感性と肉体的快楽の深い感覚とを持っていた」⁴⁾と表現される彼は、布地とそして布地によって包まれるマネキン人形とどんな感覚的關係にあったのだろうか。彼がなぜあれほどの情熱を傾けて布地に執着する女性患者たちの症例を報告し続けたのであろうか。布地に触れることによ

て逆に布地に触れられ、マネキン人形の視線に自身のまなざしの反映を見て取り、そこに「触れる・触れられる世界」(le monde de touché-touchant), 「見る・見られる世界」(le monde de vu-voyant), 無制限の相互交流の世界が形成され、ここに現実の女性と結ばれる場合と等価な、いやそれよりももっと自己本位な、自閉的、自己性欲的な官能の空間が開けてくる。自分と対話し続けるマネキン人形のまなざしによって包まれたこの「愛撫し・愛撫される」閉じた円環の中で、痛みや侮蔑、悔恨や羞恥、不安や恍惚を伴った過去のさまざまな女性像が、それぞれ複雑に、奇妙に溶け合い、変形してクレランボーの中に目眩めく官能と共に甦えらなかつたと誰が言えよう。この世界の彼の官能の炎こそ、彼の「熱情妄想病」記載に注いだ情熱の秘密である。

X その死

すでに、1927年、55歳の時、クレランボーに最初の眼症状が現われ、それが白内障によるものであることがわかるに及び、1934年1月、光を求めて彼は南国スペインのバルセローナに当時名声の高かったバラケール博士を訪ねた。手術は成功するが、彼からは、彼が久しく愛し続けた事物のレリーフの知覚が決定的に奪われたのである。「まなざしをひだひだの深みのいく千ものニュアンスの中に落とし、それを、調和の取れた曲線の優美さの中に投げ込むことを喜びとした芸術家は、事物を、もはや単一形の面でしか捕えることができなくなった……彼の生命の一部は崩壊した」⁴⁾

眼の手術を受けた頃、同時に、頑固な脊椎関節炎が彼を苦しめ、動くことができず、これが癌性のものであることを恐れ、X線照射を受け、最悪の診断を懸念しているという悲痛な手紙をバラケール博士宛てに送っている。その年の夏、症状が柔らぎ、医務局で最後の力を振りしぼって仕事を続けたが、視力は再び悪化し、自己の膨大な研究資料をまとめ上げることは到底不可能であることを知らされただけであった。ある秋の日、紙片を力なく押しやり、秘書

に「私はもう終わった」と語ったという。彼は孤独であった。古物商で買った絵は、実は自分が盗んだのだ、という罪業念慮が出現した。11月1日、最も親しかった某博士は、地方に職を得てパリを去った。死の前日、事務の手違いで講義の通知が出されなかったため聴衆は少なく、彼の姿は痛々しく見えた。そしてその後、この惨事となったのである。

クレランボーが「二重身体験」を病んでいたことを直接に物語る例証はわれわれには不足している。しかし、バラケール博士を「やせて活発で微笑んでいるロマン派の芸術家風の男」³⁾と表現している部分は、彼自身の「心理的分身」であるかのようなものである。また、「鏡」に対峙してピストル自殺をする光景から、彼が「二重身体験」から無縁であるとはどうしても言えなくなってくる。われわれは、クレランボーの死の直前の精神内界の動きを彼自身が考案した「精神自動症」記載の中の、特に「第二人格形成」の観点からのぞいてみたい衝動に駆られてくる。

事物のレリーフの知覚を失ったクレランボーの心象風景も、やはりその奥行きが狭まり、圧迫された彼は、次第に身を置く場所を失って行く。共に広がり方を失った現実空間と心象風景は、境界が曖昧となり、融合して行き、薄暮の中で、彼は少しずつ自殺へと傾斜して行く。

「鏡に向かって」の部分から次のような考察が引き出されてくる。彼の気高い第一人格は背景に退き、そのすきに第一人格から解離、派生した自律的な、下賤で憎々しい第二人格が第一人格を責めさいなみ、彼の内界では、「動物性」、「虚栄」、「敵意」が優勢となっていく。死の直前、勇敢に庭で試し撃ちをし、部屋に突撃するように駆け上って行った光景から、われわれは、下品で淫奔な彼の第二人格を射殺しようとする第一人格の最後の抵抗、復讐を見てとるこ

とができよう。鏡の中に第一人格の死をすでに先取りした第二人格に狙いを定め、これを確実に抹殺しようとしたのだが、第二人格の死と同時に第一人格も滅びてしまったのである。「自殺」とは、自らが自らを殺す「他殺行為」であるとするならば、クレランボーの場合も、クレランボーを殺したのは、やはり、クレランボーである、とすることができるのではないであろうか。

XI おわりに

一人の風変わりな天才的医者生涯について述べてみたが、彼の生涯は、彼がそう望んだように、秘密で被われ、時に、もやが晴れるようにその姿が現われることもあるが、たちどころに姿を没してしまい、その後には、彼の愛したモロッコ産の薄荷の芳香が漂うだけである。クレランボー研究は、まだこれからだ、という印象から免れ得ない由縁である。また、モロッコ・ロマンスの高い代償としての「梅毒説」が彼に対して語られないのはどうしてであろうか。

文 献

- 1) H. Ey : Études Psychiatriques III. Desclée de Brouwer, Paris, 1952.
- 2) L. Michaux : G. G. de Clérumbault et L'infirmier Spéciale. Confront. Psychiat. No. 11, p. 41—54, 1973.
- 3) Y. Papetti et coll. : La Passion des Etoffes chez un Neuro-psychiatre G. G. de Clérumbault. Solin, Paris, 1980.
- 4) E. Renard : Le Docteur Gaëtan Gatien de Clérumbault. Thèse, Paris, 1942.
- 5) P. Sivadon : J'étais Interne des Asiles de la Seine (1929—1934). Actualités Psychiatriques, No. 2, Mars, p. 22—29, 1973.
- 6) 武正建一 : 「クレランボーとその死」 日仏医学, Tome 11, No. 1, 1966.